

おわりに

本校の研究は「知識創造の力を育む授業」を主題に掲げて4年次目となります。そして、研究の年次計画における最終年次に当たります。

1年次は“かかわりの場のデザイン”として → 「どのようなかかわりの場をデザインすることが知識創造を促すか」について取り組みました。

2年次は“かかわりの活性化”として → 「かかわりをどう活性化すれば知識創造が充実し、その力が育まれるか」について取り組みました。

3年次は知識創造の“プロセスの自覚”として → 「どのようなよさの共有をめざせばよいか」について取り組みました。

最終の4年次は、過去の研究を振り返るとともに“活用する姿”として → 「本校のめざす知識創造のための活用であるかどうか」について授業実践をもとに検証を進めています。

さて、この4年間で振り返ると、主題の難解さのためか様々な紆余曲折がありました。その都度、本校のめざす知識創造の力の育成に向けて、軌道修正を図りながら取り組み続けました。複雑に絡んだ糸が少しずつ解されるように、知識創造の力の育成について、これまで見えていなかった視点が洗い出されました。

また、これまで明らかになってきたことの整理及び関係づけが進められました。さらに、検証すべき仮説のアウトラインも徐々に明確になってきました。

私たちの求める知識創造の力は教科学習に留まらない、他にも転移・応用可能な力です。不易として、子どもたちが生き生き、教師がキビキビ、適度な緊張感のある学校運営の下、個々の教師の長所を生かした学級経営により、一層効果的に育むことができるであろう力です。当然ながら、日々の授業の中で意識的に、しかも繰り返し行わせる活動経験が重要なことは言うまでもありません。

研究の節目となる今、本校の当面の課題として「新しい学習指導要領の趣旨に沿った教育課程の編成」「学校研究の在り方」「社会の変化に対応した附属学校の在り方」等あげられます。研究協議の折には、皆様から多くのご示唆をいただけることを願っております。

皆様方の忌憚のないご意見、ご指導をよろしくお願いいたします。

金沢大学附属小学校

副校長 山下 尚



研 究 同 人

金沢大学附属小学校

校 長	井 原 良 訓
副 校 長	山 下 尚
学内教頭	北 川 忠

国 語 科	高 田 徹	笠 松 雅 美	伯 耆 身 奈 子
社 会 科	寺 岸 和 光	基 村 俊 成	上 田 雅 人
算 数 科	金 岡 弘 宣	岡 山 優	木 谷 崇
理 科	戸 田 真 実	岩 崎 誠	芝 田 朱 里
生 活 科	山 岸 留 美	中 山 良 恵	
音 楽 科	乗 富 章 子	大 滝 菜 保 美	橋 本 俊 彦
図 画 工 作 科	坂 井 容 子	宮 本 美 紀	
家 庭 科	藤 本 文 乃		
体 育 科	山 下 亜 寿 佳	古 田 正 樹	
道 徳	北 川 忠	松 井 由 紀	
情 報 教 育	中 山 信 之		
保 健 教 育	木 戸 壽 和 子		

英 語 部 会	笠 松 雅 美	木 谷 崇	乗 富 章 子
	基 村 俊 成	古 田 正 樹	岩 崎 誠
	藤 本 文 乃		
情 報 部 会	金 岡 弘 宣	坂 井 容 子	上 田 雅 人
	松 井 由 紀	岡 山 優	中 山 信 之
	橋 本 俊 彦		
授 業 実 践 部 会	中 山 良 恵	木 戸 壽 和 子	山 岸 留 美
	大 滝 菜 保 美	伯 耆 身 奈 子	芝 田 朱 里
	戸 田 真 実	宮 本 美 紀	山 下 亜 寿 佳
	寺 岸 和 光	高 田 徹	

旧 同 人

八 崎 和 美	今 井 直 人	山 本 瑞 穂
山 岸 朋 子	松 田 宏 明	笠 松 幹 生
江 藤 里 佳	橋 田 真 由 美	奥 山 さ や か

